

天橋刑場論 - 民国北京の新聞・画報を主な資料として -

著者	大谷 亨
雑誌名	国際文化研究
号	19
ページ	17-31
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/56329

天橋刑場論

— 民国北京の新聞・画報を主な資料として —

大 谷 亨

要 旨

洋の東西を問わず、前近代社会では、刑場はしばしば市場に設けられ、処刑は民衆の目に晒された。民国期、北京には天橋と呼ばれる市場が存在し、そこには刑場が設けられていた。天橋が栄えた民国期は、一般に近代化の時代と見なされている。そのためか、天橋刑場があたかも近代化を体現する刑場であったかのような言説さえ存在する。小論では、天橋における市場と刑場の関係に注目しつつ、民国期到北京で発行されていた新聞、画報を主な資料として、天橋刑場の前近代的な性格を明らかにしていく。

キーワード：民国／北京／都市／天橋／刑場／新聞／画報

はじめに

小論は、民国期の北京を代表する巨大な市場、天橋に存在したとされる刑場についての考察である。そもそも筆者が天橋という地域、特にそこに設けられた刑場を考察の対象としたのは、赤坂憲雄『異人論序説』（筑摩書房、1992年）の影響がある。該書において論じられる共同体の周縁部、いわゆる「境界」の特徴が、天橋という地域にことごとく当てはまる気がした。天壇や先農壇という聖域に隣り合わせ、境界の象徴としての橋を中心に市場が広がりを見せ、さらに、中世日本における平安京の東西の市や、鎌倉の化粧坂、或いは、阿部謹也『刑吏の社会史』（中央公論社、1978年）において紹介された、中世ドイツのエレンバッハやオーベルロスバッハの如く、広い地域にわたって見られる市場刑場が、天橋にも存在したのである。

中国においても、棄市と呼ばれる市場における公開処刑が古くには存在した。相田洋氏は、その棄市をまさに「境界論」の枠組みで論じている。⁽¹⁾ 相田氏は、棄市の祝祭性に注目し、その本来の意義を、罪を犯した受刑者を共同体から追放し天に送り届ける、ということにあるとした。共同体の外部との交易の場、つまり異界への入り口である市場が刑場となるのはそれ故であった。

先述の通り天橋は、「境界論」という枠組みで考察する格好の対象といえる。しかしその一方で、天橋が隆盛を誇った民国期が、一般に近代化の時代と見なされているということが、一つ大きな足枷となる（小論ではここでの近代化を、中国土着の思想や制度が、西洋から流入した概念に取って代わられることを指すと解釈する）。そこで小論は、天橋刑場を取り巻く状況が、果たして従来言われるような近代化という切り口で捉えきれものなのか、ということを確認していきたい。具体的には、天橋刑場をことさら近代化という側面で捉え、中国土着の棄市との間に、あえて断絶を見

いだそうとする言説が果たして妥当なのか、天橋刑場を成り立たせていた観念が、むしろ前近代から連綿と継続しているものであると解釈することは出来ないのか、ということを検討を進めるなかで明らかにしていきたい。

そこで重要となるのが、市場と刑場の繋がりに注目するということである。天橋刑場の近代性を強調する際、その最大の根拠となるのが、前近代的処刑の最大の特徴である公開処刑が否定されていたということである。しかし、本当に公開処刑は否定されていたといえるのだろうか。公開処刑という要素を完全に排除したいのなら、なぜあえて当時有数の市場であった天橋に刑場が設けられなければいけなかったのか。より適切な場所は他にいくらでもあったであろう。つまり、天橋という市場と、そこに存在したとされる刑場、両者の間を繋いでいたものについて考えていくことで問題は解決するのではないだろうか。

まずは刑場が存在したとされる天橋という特異な地域についてしっかりと押さえることから始めよう。その成り立ち、その範囲、そして天橋という地域における刑場の正確な位置を確認していく必要がある。これらの作業を行わなければならない理由は後に詳しく触れるが、実は刑場の位置が、天橋の中心部から極めて離れているからなのである。つまり、刑場を天橋という地域と結びつけて考えてよいのか否か、極めて判断がつきにくいのだ。公開処刑の有無や、それを根拠とする天橋刑場の性格の理解に分歧が生じるのは、すべてここに端を発するといっても過言ではない。これらを考察することが、天橋刑場の性格を明らかにする鍵となる。

第1章第1節 「天橋」の成り立ち

本論で扱うところの「天橋（てんきょう）」が指しているものは二つある。一つは、天橋という橋であり、もう一つは、天橋という橋を中心に広がる天橋という地域を意味する。「天橋」は、橋の名から地域の名へとその意味を拡大していった（以下、橋を指す場合は「天橋－橋」、地域を指す場合は「天橋－地域」と示す）。ここではその過程について述べておきたい。

「天橋－地域」の歴史については、張次溪『天橋一覽』⁽²⁾ 及び安藤更生『北京案内記』⁽³⁾ で詳述されている。『北京案内記』によれば、「天橋－地域」のルーツは、明代永楽初年、「天橋－橋」の東西に存在した窮漢市と日昃市まで遡ることができる。清代道光・咸豊年間に、天壇、先農壇沿いに露天が現れ、その規模は徐々に拡大していく。

清代の北京には代表的な繁華街が六つ存在した。地安門、東四牌楼、西單牌楼、崇文門外の花市、宣武門外の菜市口と前門外である。前門外を除く五カ所の繁華街は、時勢の移り変わりとともに廃れ、その役割は「天橋－地域」に流れていった。こうして、前門外と「天橋－地域」が清末の代表的な繁華街となる。

そして民国二年（1913年）の路面電車の開通、民国五年（1916年）の先農壇の外壁撤去なども大きく作用し、「天橋－橋」の東西にいくつもの市場が出現したというのである。

この『北京案内記』における表現を直接借りるならば、「露店芝居、手品師、講談師胡弓に合わせる（ママ）竈間い唄声、太鼓が響いて口紅が綻びると支那の安来節が流れ出す茶館、街頭食堂、古着屋

(中略) ゲテ物の骨董屋、小盗児市、陰陽師、軒を並べる歯科医(中略) 錆びた空き缶からお白粉の古瓶、古ボタンの一個が商品になる天橋⁽⁴⁾が誕生し、「天橋」が単なる橋の名から、地域の名となったのは、ちょうどこの時期に一致している。⁽⁵⁾

「天橋－橋」はもともと巨大な橋であった。しかし、光緒三十二年(1906年)に小さく建て直されたのを皮切りに、幾度の工事を経て、民国二十三年(1934年)にとうとう橋自体が撤去されてしまった。⁽⁶⁾「天橋－地域」の発展と反比例するかのように、「天橋－橋」はその存在自体が消失し、地名としての「天橋」のみが残ることとなったのである。

第1章第2節 「天橋－地域」の範囲

橋の名から地域の名となった「天橋」であるが、「天橋－地域」は、行政区画として範囲が厳密に定められていたわけではなく、漠然とした娯楽施設の集合体として認識されていたに過ぎなかった。

いくつかの資料には、「天橋－地域」の範囲を枠線で囲んで示した地図が載っている(図1-1⁽⁷⁾、1-2⁽⁸⁾)。しかし、範囲をこのように定めた根拠については、往々にして明記されてあるとはいえない。

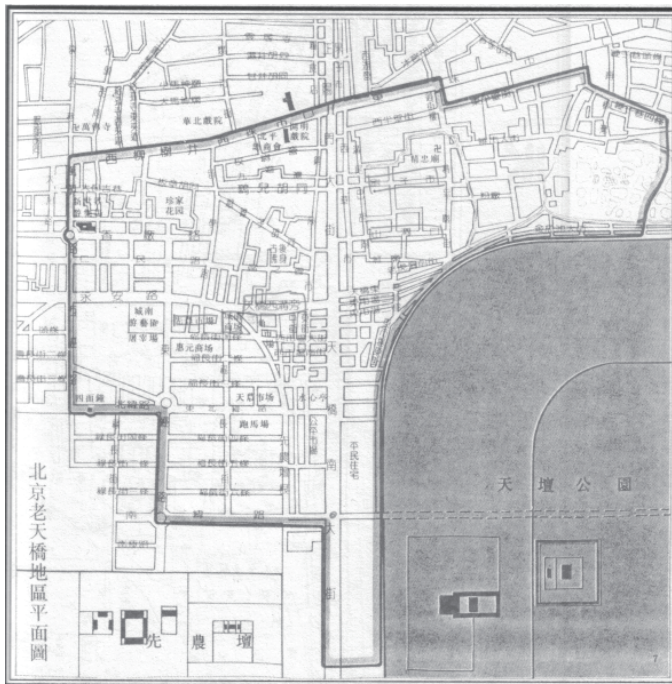


図1-1 (『北京老天橋』より)



図1-2 (『天桥旧話』より)

まず図1-1があり、図1-2は図1-1を再解釈し、修正をほどこしたものと考えられる。⁽⁹⁾ 両者を比較すると、図1-2は全体的に「天桥-地域」の範囲を狭く捉えているのがわかる。

岳永逸『空間、自我与社会 天桥街頭芸人的生成与系譜』のなかで、「天桥-地域」の範囲に関して、こう記されている（以下〔 〕内の語句は筆者による補足）。

天桥〔-地域〕には、広義と狭義の違いが存在する。広義の天桥〔-地域〕は天桥南大街を軸として、現在の宣武、崇文両区を東西にまたがる。北は珠市口まで、東北は天壇公園西門まで、西南は南纬路まで、西は万明路、西经路まで。狭義の天桥〔-地域〕は老人達の記憶のなかに残る、芸人がいた三角市場、公平市場、先農壇市場などが含まれる天桥という橋の西南の部分で、周囲がわずか二里にも満たない場所のみを指している。⁽¹⁰⁾

引用部分の記述に従えば、図1-1と図1-2はどちらも広義の「天桥-地域」に該当するということになる。一方、狭義の「天桥-地域」というのは、「天桥-地域」と呼ばれた範囲のなかでも、「天桥-橋」周辺の市場や演芸場が密集していた地域である。

「天桥-地域」の範囲に関するいくつかの異なる見解の存在から、その範囲というのは、それを規定しようとする主観によって様々に変化するものであることがわかる。演芸場や主要な市場など、「天桥-地域」としての地域性が最も色濃く表れている部分に注目するのなら、岳氏のいう狭義の「天桥-地域」になるし、そういった場所から外れるものの、「天桥-地域」の一部として認識されていた地域まで含めると、それは広義の「天桥-地域」となる。

次に示す図1-3⁽¹¹⁾は天桥刑場の位置を示した地図である。

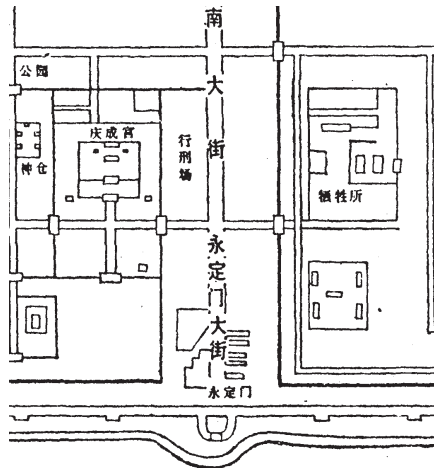


図1-3 (『燕都叢考』より)

地図中央を通る、天橋南大街が永定門内大街と交わる手前、西側に「行刑場」とある。天橋刑場は、この位置にあったといわれることが多い。⁽¹²⁾ 刑場は「天橋－地域」に存在したという前提で話を進めてきたが、先に示したいくつかの「天橋－地域」の範囲を現した地図と併せて見れば、刑場はそう断言しがたい微妙な位置にあることがわかる（図1-1は刑場の位置まで「天橋－地域」の範囲を認めている部類であり、図1-2は刑場の位置を「天橋－地域」の範疇から完全に外している例である）。

このような現象が起こるのは、先述のとおり、「天橋－地域」の範囲というのが、当時の人々の共通感覚によって成り立った、非常に曖昧なものであるということがあげられる。次章では、刑場の位置と「天橋－地域」との関係について、より具体的にいえば、刑場が「天橋－地域」に存在したという前提は正しいのか否かということについて検証したい。

小論において重要なのは、天橋刑場が、棄市の延長線上に位置づけられるものであるのか否かということであり、処刑の際に観衆を伴う祝祭空間となり得ていたのか否かということである。それらを検討するうえで、刑場が位置的に、当時有数の市場であった「天橋－地域」と結びつけられていたのか否かということは一つの基準となり得る。さらに、事実として刑場の位置は、「天橋－地域」の中心部から、かなり距離を隔てていたため、仮にそこが「天橋－地域」の範疇であると認識されていたのであれば、刑場と市場が密接に結びつくことで成り立っていた棄市という土着の刑場に対する観念が、当時なお息づいていたことの何よりの証拠となるだろう。

第2章 刑場は「天橋－地域」に存在したのか

「天橋－地域」の歴史や風俗を網羅的にまとめた『天橋旧話』において、北京史の専門家、王永斌氏（1924-2011）は、以下のような主張を行っている。

天橋〔－橋〕の橋の周囲は刑場になったことはない。刑場は天橋〔－地域〕の南側の先農壇の一番目の壇門のなかの二番目の壇門に位置し、俗に「二道壇門」と呼ばれ、また「二道壇門刑

場」と呼ばれた。ここは天橋〔－地域〕とは無関係である。ある本の中では先農壇の「二道壇門」を「天橋二道壇門」としており、これによって、一部の人々が天橋〔－地域〕が刑場になったことがあると誤認しているのである。⁽¹³⁾

王氏はおそらく、「天橋－橋」の周辺のみが「天橋－地域」であって、それ以外の場所を「天橋－地域」と認識すべきでないとしており、したがって「天橋－地域」に刑場が存在したとするのも誤りである、という認識を示している。しかし、これはあくまで王氏個人の見解であり、当時の一般的な認識と必ずしも合致するとは限らない。

第2章第1節 刑場の名称から考える

王氏によって、刑場が「天橋－地域」と関係がないとする根拠として取り上げられている刑場の名称から、果たして本当に刑場が「天橋－地域」に存在したと見なすのは間違いであるのか否か、検証を試みたい。

引用部分において示された刑場の位置は、図1－3に示された刑場の位置と合致する。そのため、刑場の位置の認識において、小論と王氏の間に齟齬がないことがまず確認できよう。王氏は刑場の位置を正確に認識した上で、そこが「天橋－地域」とは全く関係のない場所だとしているのだ。

王氏が刑場の位置を「天橋－地域」の範疇でないとするのは、そこが「天橋－橋」からかなり離れた位置に存在するからであり、それゆえ「天橋二道壇門」という表記も誤りであるという。

では、刑場を「天橋二道壇門」と（誤って）表記した出版物が、王氏が恐らく指しているであろう現代の出版物ではなく、「二道壇門」で処刑が行われた頃と同時代の出版物であったなら、話は変わってくるのではないか。そこで取り上げるのは図2－1⁽¹⁴⁾、『醒俗浅説報（せいぞくせんせつほう）』という、民国期に発行された画報の記事である。



図2－1（『醒俗浅説報』より）

この記事では、後ろから二行目に、処刑を行った場所を「天橋二道壇門」と明記している。王氏の主張する、「天橋二道壇門」という表記が誤りだとする説は、同時代資料によって否定されるというわけだ。正式な名称であると断言することは出来ないが、当時の一般的な共通認識として「天橋二道壇門」という呼び名があり、さらに、それが通用していたということがわかるのだ。紙幅の関係上提示することは出来ないが、刑場の位置よりさらに南に下った位置でさえ、「天橋－地域」と結びつけられて認識されている状況が、その他の画報の記事からも見えてくるため、『天橋旧話』における、刑場と「天橋－地域」の関係を否定する王氏の主張が成り立ちにくいことは明白である。

以上のことから、刑場が「天橋－地域」の範疇として認識されていた、という前提で話を進めることに何ら問題がないということが明らかとなった。ただし、本章において明確になったのは、あくまで刑場の位置が地理的に「天橋－地域」の範疇として認識されていたということに過ぎない。次の段階として、実際に天橋刑場に「天橋－地域」らしさが伴っていたのか否か、つまりは地理的次元の他に、内実として処刑の際に観衆が集まりうる環境にあったのか否かということ、また別に明らかにする必要がある。

第3章 天橋刑場の実体

「天橋－地域」の刑場の性格を明らかにするにあたって、一つの手がかりとなるのは、清代から民国期に時代が移り変わるにともない、刑場が移動したという点である。

清代の北京を代表する刑場は、商業の中心地の一つであった菜市口に設けられていた。この地域は往来の激しい場所で、為政者は見せしめの意味を込め、多くの罪人の首を切り落としたという。それが民国期になると、刑場は「天橋－地域」に移される。そこに託された意味はいかなるものであったのだろうか。

第3章 第1節 「天橋－地域」の刑場をめぐる二つの言説

「天橋－地域」への刑場の移動に関する分析については、大きく分けて二種類が存在する。一つは、刑場の移動という現象に近代化という変化を見いだすものであり、もう一つは、そこにあえて変化という視点を持ち込まないものである。小論では、天橋刑場の性格を明らかにするための叩き台として、両者の主張を見比べていきたい。

前者の例として、李立「从菜市口到天橋－近代中国死刑制度的衍变」⁽¹⁵⁾がある。ここでは、「天橋－地域」へ刑場が移動した背景に、中国における法制度や道德觀念の進歩があると主張されている。李氏は、清末における諸外国の侵略に対する清王朝の対応に、中国における伝統的な死刑制度の終焉と、近代的な死刑制度誕生の契機を見ている。

西洋の人道主義的法制思想の影響のもと、野蛮とされる斬首を初めとした前近代的な死刑制度の改革が取り組まれ、1914年、処刑法が銃殺刑一つに統一される。ここに来て、北京の刑場にも変化が生まれる。

直ちに、北京の刑場も人口が密集している菜市口から、広々とした天橋南大道の西側の先農壇

二道門外に移された。⁽¹⁶⁾

李氏は、刑場の「天橋－地域」への移動は、罪に対する処罰、という側面の純化であり、犯人に必要な以上の屈辱を与えることや、見せしめの要素が排除されたのだと解釈しており、中国における人道主義精神の進歩を読み取っている。

ただ、李氏の分析には矛盾点も見られる。例えば、菜市口から「天橋－地域」への動きを、人口密集地から、それと対照的な場所への移動としている。第1章第1節で述べたとおり、清代に繁栄した菜市口の繁華街は、時勢の移り変わりと共に「天橋－地域」に移動した⁽¹⁷⁾のである。「天橋－地域」には人が溢れかえっていたはずである。確かに、刑場の位置が「天橋－地域」の中心から離れた空き地であることを考えれば、李氏の主張も成り立つ。ただし、第2章で検証したとおり、刑場の位置が、当時は有数の繁華街であった「天橋－地域」の範疇であると見なされていたということは看過できない事実であろう。

李氏の主張は、まさに岳氏のいう、「天橋」という名称における広義と狭義を、混乱したままなされているのである。広義の「天橋－地域」と狭義の「天橋－地域」を意識的に分けて李氏の認識を解釈すれば、刑場の位置は広義の「天橋－地域」には含まれるかもしれないが、そこは決して繁華街としての狭義の「天橋－地域」には含まれないため、そこに人々が集まることはなかった、という論理である。

確かに、刑場の位置した「先農壇二道門外」は、狭義の「天橋－地域」に含まれないことは明らかである。しかし、だからといって、それが処刑に見物人が集まらなかったことの根拠にはならない。実際にはどうであったのか検証が必要であろう。

検証を始める前にもう一つ、李氏に対立する言説を見ておこう。『北京晩報』のエッセイ、「老北京的天橋」(2010年6月2日、無署名)にはこうある。

解放前の天橋〔－地域〕は、訪れる人が非常に多かったため、その影響力の及ぶ範囲も広く、北洋軍閥、国民党政府や日本の傀儡政権は、天橋〔－地域〕に刑場を設けた。その場所は、天壇二道壇門^(ママ)の空き地である。有名なジャーナリストの邵飄萍、林白水や抗日将帥の吉鴻昌等は皆ここで殺害された。⁽¹⁸⁾

『北京晩報』の記事は、「解放前の天橋〔－地域〕は、訪れる人が非常に多かった」ということが根拠となり、「天橋－地域」に刑場が設けられたと書かれてある。

『北京晩報』の記事における、天橋刑場の性格に関する認識は、李氏とは逆の立場にあるといえる。しかし、「天橋－地域」の中心部と、その周縁部を混同しているという部分では、李氏と同様の矛盾を犯しているといえる。訪れる人が非常に多かった「天橋－地域」は、「天橋－地域」のなかでも市場や演芸場が集まった、いわゆる狭義の「天橋－地域」のことである。しかし、刑場の位置は狭義の「天橋－地域」の範疇にはない。よって、いくら狭義の「天橋－地域」に人々が集まっていようと、刑場の位置にも同じ環境があったことにはならないのである。やはり、かつての人々の認識において、刑場が「天橋－地域」に含まれていたということとは別に、改めて、実際にそこに人々が集まったかどうかについて検証をする必要がある。

第3章 第2節 「天橋－地域」に設けられた刑場の実態

本節では、当時の刑場の様子を明らかにするために、民国期の画報や新聞を資料として検証を行いたい。まずは、『北京画報』の記事である、図3-1⁽¹⁹⁾。



図3-1 (『北京画報』より)

これは、京師衛戍司令の王將軍が、当時北京で頻発していた子供の誘拐事件に対し、その対応策を命令した、といった内容の記事である。その命令とは、「誘拐犯を捕らえたら、取り調べをし、直ちに市中引き回しを行い、天橋まで連行し銃殺刑に処して、人々の気持ちをスッキリさせるように」⁽²⁰⁾ というものであった。

どうやら、当時の人々は犯人が処刑されると気持ちがスッキリしたようだ。犯人を市中引き回しにせよと命じていることから、人々は報道を通してではなく、実際に現場に立ち会うことで鬱憤を晴らしていたのだろう。それは図3-1の挿絵からも伺える。人だかりのなかでも、手前の右手に、そして最も遠方に、野次馬達の姿が描かれている。彼等は、街で罪人が引き回されているのを目撃し、その後を追って最終地点である「天橋－地域」の刑場までついて来てしまった人々、あるいは、騒ぎを聞きつけて集まって来た、「天橋－地域」周辺にいた人達の姿であろう。もちろん、注意しなくてはならないのは、これはあくまで命令が出されたことに関する報道であり、この命令が実行されたという確証はこの記事そのものではなく、挿絵も空想を頼りに描かれた可能性が否定できな

い。しかし、処刑は見物するものだ、という当時の一般的な認識が存在したからこそ、この挿絵は描かれたと考えられる。「天橋－地域」の刑場に人々が集まってくる状況は、ごく自然なものであったのではないだろうか。

『晨报』の記事にも、市中引き回しに関するものがある。

1923年6月15日の記事に、「槍斃盗犯（窃盗犯を銃殺）」という見出しのものがある。二人の窃盗犯の死刑が確定し、彼等を刑場まで連行する際の様子をよく伝える記事である。一部を引用する。

〔死刑囚を含め一行は〕車に乗り、地安門を経て、西長安街を走り、宣武門を出て、菜市口、驛馬市、西珠市口から天橋の南に駆けつけ、銃殺刑を執行した。二人の犯人は道中、大声で叫び、野次馬達は後について喝采した。前門大街に出たとき犯人の一人が大声でわめき、車のスピードを落とさせ、運転手を罵ってこう言った「こんなに急ぎやがって。急いで着いちゃったら、あんたはやる事が無くなるし、俺たちも終わっちゃうんだ」野次馬達は声をそろえて喝采した。⁽²¹⁾

市中引き回しのルートや、その際の死刑囚及び野次馬達の振るまいが細かく記録されている。当時の新聞、画報には、こういった記事は数多く残っており、図3-1の記事の内容が実行されていてもおかしくない状況であったことがわかる。やはり、「天橋－地域」における処刑は、大衆に受刑者を晒す意図のもと行われ、刑場には多くの野次馬が集まっていたことがわかる。

では最後に、「天橋－地域」と刑場の強い結びつきが確認できる画報の記事を確認しよう。まずは『醒俗浅説報』より、図3-2⁽²²⁾。この記事の挿絵をよく覚えておきたい。

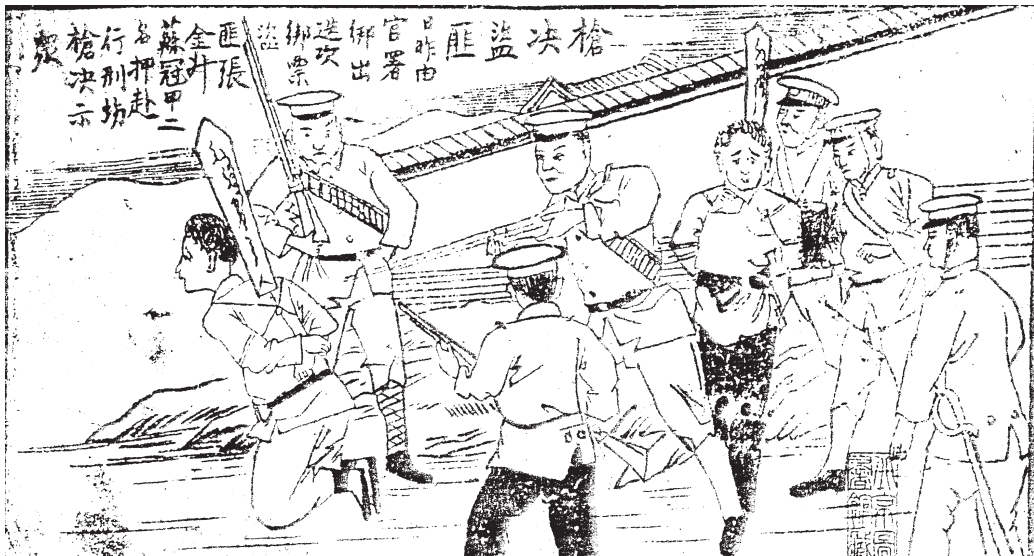


図3-2（『醒俗浅説報』より）

図3-2には「槍決示衆（銃殺し大衆に晒す）」の文字が見える。ただし、ここには処刑を行った場所が「行刑坊」としか記されていない。「行刑坊」とはいったいどこのことなのだろうか。続いて『北京画報』より、図3-3⁽²³⁾、3-4⁽²⁴⁾。

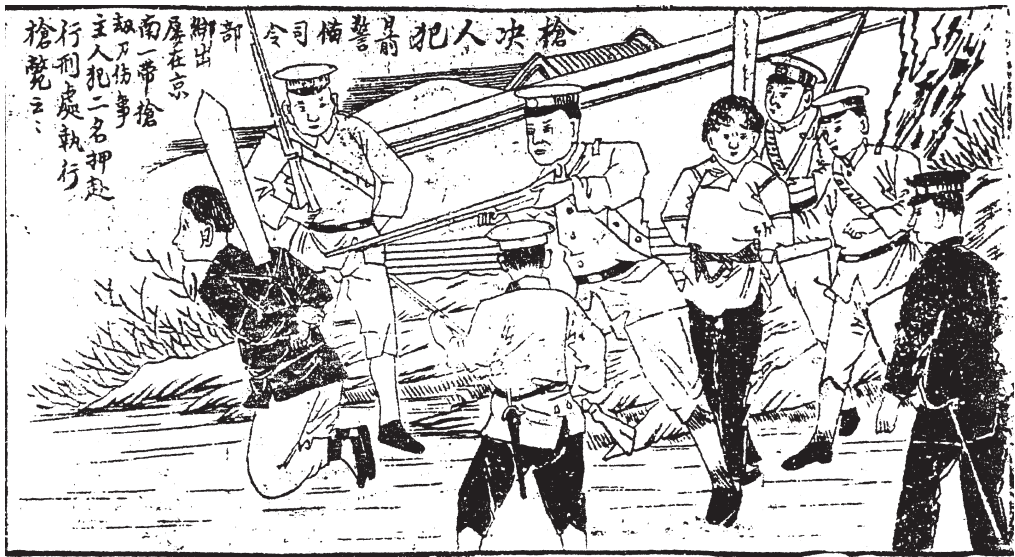


図3-3 (『北京画報』より)



図3-4 (『北京画報』より)

図3-2、3-3、3-4はそれぞれ全く異なる事件について書かれたものである。それにもかかわらず、使われている挿絵は基本的に同一といえる。

おそらく、この三つの記事の挿絵が類似しているのは、これらが全て、次に示す、「天橋-地域」の刑場の風景として描かれた(記事には、「押赴天橋(天橋に連行し)」とある)、図3-5⁽²⁵⁾から派生したものであるためではないだろうか。⁽²⁶⁾



図3-5 (『北京画報』より)

ところで、図3-2、3-3、3-4のうち、唯一、図3-4に「東大橋」と、処刑が行われた具体的な地名が明記されてある。ただし、残された記録の数から見ても、「天橋-地域」におけるものがメインの刑場であったことは間違いない。図3-4は例外だからこそ、わざわざその地名が記されたと考えられよう。

図3-3、3-4には、処刑を行った場所が明記されていない。これはつまり、刑場＝「天橋」という認識があったからこそ、具体的な場所が明記されないままの記事が成立したのである。何も書かれていない場合は、「天橋-地域」に設けられた刑場を指していると判断するのが妥当であろう。

使い回された挿絵は、図3-5の挿絵の左半分がもとになっており、⁽²⁷⁾ 繰り返し紙面に登場する内に、「天橋-地域」における処刑風景の記号となっていったと考えられる。これらのことから、当時「行刑場」や「行刑坊」という一般名詞が、「天橋-地域」に設けられた刑場、もしくは「天橋-地域」そのものと結びついた実質的な固有名詞となっていた状況が伺える。

天橋刑場は、地理的に「天橋-地域」の範疇とされていたことと、そこで行われていたのが、極めて「天橋-地域」らしい大勢の野次馬を伴った見世物的処刑であった、という二つの側面から（両者は相互補完関係にもある）、民国期の北京を代表する市場であり繁華街であった「天橋-地域」と、密に結びついた存在であったということがいえる。そして、それは同時に、「天橋-地域」と天橋刑場の関係が、前近代の中国における、土着的な市場と刑場の結びつきと何ら変わらぬものであったということを意味するのである。

おわりに

民国期に入り、北京の刑場は「天橋-地域」に移動した。「天橋-地域」は民国期の北京を代表する市場であり、有数の繁華街であった。刑場の位置は「天橋-地域」の中心部から外れるものの、そこはまぎれもなく「天橋-地域」の一部として認識され、大勢の野次馬を伴う中国の伝統的な棄市と本質を異にしない処刑が行われていたことが明らかとなった。

小論は、天橋刑場の分析において、近代化という側面ばかりを強調する言説を批判し、むしろそ

こに変化を見るよりも、前近代が継続していたと捉えた方がより本質を捉えることができるのではないか、という立場を取った。確かに、行政側の残した記録に、制度上の近代化と見なしうる文言を発見できるのは否定できないのだろう。しかし、小論で行ったように、当時の新聞、画報を確認すれば、天橋刑場を取り巻く実際の状況は、行政文章から見えてくる理念とはかけ離れたものであったことがいえる。

また、本論では触れられなかったが、刑場が「天橋－地域」の中心部から外れる少々辺鄙な位置にあったことにも一定の意味があったと考えられる。当時、処刑において採用されていたのは銃殺刑であり、それなりの広さを持つ空間が必要であったのは間違いない。つまり、銃殺による処刑が可能で、なおかつ人々が集まり得る環境が必要であった。そこで選ばれたのが、「天橋－地域」の南端、まさに天橋刑場の位置であったというわけである。

注

- (1) 相田洋『異人と市－境界の中国古代史－』研文出版、1997年、88－129頁。
- (2) 張次溪『天橋一覽』中華印書局、1936年。
- (3) 安藤更生『北京案内記』新民印書館、1941年、298－305頁。
- (4) 同前書、298頁。
- (5) 北京市崇文区地方志辦公室編『天橋旧話』中華書局出版、2007年、9頁。
- (6) 張次溪『天橋叢談』北京人民大學出版、2006年、7頁、24頁。
- (7) 王立行主編『北京老天橋』北京出版社、1990年、7頁。この地図は、劉仲孝『天橋』（北京出版社、2005年）等に引用されている。
- (8) 注(5)前掲書、挿図頁。
- (9) 断言することは出来ないが、図1－2には図1－1に記された「天橋－地域」の範囲を表した枠線の一部が残っていたり、その他共通要素が多く見られるため、このように判断した。
- (10) 岳永逸『空間、自我与社会 天橋街頭芸人的生成与系譜』中央編輯出版社、2007年、20－21頁。原文は「天橋有广义和狭义之分。广义的天桥以天桥南大街为轴，东西横跨现今的宣武、崇文两区，其北到珠市口，东北到天坛公园西门，西南到南纬路，西到万明路、西经路。狭义的天桥仅指在老人们记忆中存留的有卖艺表演的包括三角市场、公平市场、先农坛市场等在内的天桥这座桥西南侧，方圆不到二里的地方」。
- (11) 陳宗蕃編著『燕都叢考』北京古籍出版社、2001年、643頁。原刊本は1931年初版である（『燕都叢考』は三編に分かれており、原刊本刊行年にばらつきがある）。
- (12) 段柄仁主編『北京胡同志』（北京出版社、2007年）には「先農壇東街」の項に「明清时此处为先农坛外的空地，民国时为天桥刑场。1949年后刑场迁移他处（明、清代において、ここは先農壇外の空き地であった。民国期には天橋の刑場となった。1949年以降、刑場は他所に移された。）」（608頁）とあり、「光明里」の項には「1949年前此地为刑场。（中略）后来刑场移往别处。（1949年以前、ここは刑場だった。（中略）後に刑場は他所に移された。）」（610頁）とある。
「他处」というのがどこを指しているのか明らかではないが、我々が検証しているのは、『北京胡同志』において述べられている、1949年以前の位置に存在した刑場であり、それはさしあたり図1－3に示された位置と一致すると考えられる。（図1－3に示された刑場の位置と「先農壇東街」と「光明里」は、南北に少しずれるが、先農壇沿いのほぼ同じ位置である）。
- (13) 注(5)前掲書、5頁。原文は「天桥的桥周围从未做过刑场。刑场是在天桥南边的先农坛第一座坛门里边

的第二座坛门，俗称“二道坛门”，也称“二道坛门刑场”。这里与天桥无关。有的书中将先农坛“二道坛门”误写为“天桥二道坛门”，因之，一些人就误认为天桥曾做过刑场」

引用部分は、3頁からはじまる「天橋の橋」という項の一部であり、「天橋－橋」の歴史的変遷が語られるなか、やや唐突に刑場に話題が転換され、他書における誤った記述への指摘が始まる。

王氏は1924年生まれで、幼少期から北京の街に親しんだようで、小論で扱う時代の同時代人の部類に入る。そういった意味で、王氏の証言には一定の信憑性が伴う。しかし、「清末杀犯人就没有“示众”之举(清末において犯人を処刑する際、それを公開するというようなことはなかった)」(同前書、5頁)といったような、小論において後に棄却されるような主張も同時に行っているため、王氏の主張を改めて検証する余地は十分あると考えられる。

王氏の経歴については、2011年06月11日の『新京報』の記事、「老北京民間“活字典”王永斌辞世」

[http://epaper.bjnews.com.cn/html/2011-06/11/content_241947.htm?div=1]に詳しい。

- (14) 国家図書館古籍文献叢刊／国家図書館分館文献開発中心編、『清末民初報刊図画集成続編17(『北京画報』、『順天画報』、『醒俗浅説報』、『醒華日報』)』全国図書館文献縮微複製中心、2003年、7877頁。『醒俗浅説報』の発行時期は分かっていないが、図2－1より古い記事に、城南遊芸園に関するものがあり、注(6)前掲書、18頁によれば城南遊芸園が出来たのは1918年なので、それ以降の記事となる。また、第3章第2節で詳しく述べるが、図2－1の挿絵は1923年に発行された『北京画報』の記事がもとになっていると考えられるため、1923年以降のものである可能性が濃厚である。さらに、記事の中に「衛戍司令部」という機関が登場するが、俞鹿年『中国官制大辞典』(黒龍江人民出版社、1998年、1118頁)によると、この機関は1924年10月28日に「京畿警衛總司令部」に取って代わられるので、それ以前の記事だと特定できる。よってこの記事は、1923年から1924年頃のものであることが推測される。ちなみに、小論で扱う画報のうち、具体的な発行年が分かっているのは『北京画報』のみである。
- (15) 李立「從菜市口到天桥——近代中国死刑制度衍変」『政府法制』、山西人民出版社、2003年、18期、30－31頁。
- (16) 同前書、31頁。原文は「隨即，北京的刑场也从人口稠密的菜市口迁至当时空旷的天桥南大道西的先农坛二道门外」。
- (17) 注(3)前掲書、303頁。
- (18) 無署名「老北京的天橋」、『北京晚報』、2010年6月2日。
[<http://bjjs.beijing.cn/yxbj/whjq/n214097197.shtml>]
原文は「解放前的天桥，由于游人众多，影响范围大，北洋军阀政权、国民党政府和日伪政权将天桥设立为刑场，地点在天坛二道坛门的空地上。著名报人邵飘萍、林白水^(フナト)和抗日将领吉鸿昌等，都是在这里杀害的」。
- (19) 注(14)前掲書(『北京画報』)、7524－7525頁。
- (20) 原文は「如拿獲拍花匪訊明立即押赴遊街後押赴天橋執行槍決以快人心」。
- (21) 『晨報』人民出版社、1980年、複製版、25巻、592頁。原文は「乘坐汽車經地安門，走西長安街，出宣武門，由菜市口驛馬市西珠市口，奔天橋迤南，執行槍決。二犯沿路大唱，看熱鬧的跟隨喝彩。至前門大街時，一犯在車內大嚷，令車慢開。并罵司機人曰：『你將車開的這們快，趕緊到了你沒事啦，我們也就完了』。看熱鬧的齊聲叫好」。
- (22) 注(14)前掲書(『醒俗浅説報』)、7838頁。
- (23) 注(14)前掲書(『北京画報』)、7682頁。
- (24) 同前書、7732頁。
- (25) 同前書、7522頁。この記事の内容も図3－1と同じく、実際に起きたことではない。
- (26) 先述の通り、『北京画報』の記事は1923年のものであり、注(14)前掲書において登場した順番を参考に記事間の新旧を判断している。

- (27) 図3-2、3-3、3-4の三例以外にも、「天橋-地域」の刑場の挿絵の多くは、図3-5がもとになっていると考えられる。例えば図2-1の挿絵もそうであろう。

